

令和 6 年 6 月 16 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K03222

研究課題名（和文）生徒のつながりと安心感を育む学校予防教育と持続的ケアシステムの構築

研究課題名（英文）Construction of school-based prevention and sustainable care system to develop students' social bond and sense of security

研究代表者

庄司 一子（Shoji, Ichiko）

東海大学・児童教育学部・特任教授

研究者番号：40206264

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：現代の学校教育の問題は増加し続け、背景には共感の喪失、対人関係の不足が指摘され、子どものwell-being、安心できる学校風土醸成は喫緊の課題である。本研究の目的は、ピア・サポートによる学校予防教育を進め、学校ケアシステム構築の効果と継続要因を明らかにすることであった。対象は公立中学校実践A校248名、非実践校1,000名で、実践校では研修を受けた生徒が学校全体の取組みの中心となり3年間継続的に取り組んだ。調査の結果、生徒の仲間との絆、安心感、学校適応感、学級風土に効果が示され、学校ケアシステム構築における教師の理解と協力、学校全体の継続的取組みの重要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、学校適応に困難を抱える生徒だけでなくすべての生徒にとって、学校が安全、安心な場所となり、互いに学び合える場所、学校・学級風土を醸成するため、生徒が中心となって教師と共に学校予防教育に取り組むこと、継続的・縦断的に取り組むことによる持続的「学校ケアシステム」構築をめざした点にある。学校予防教育を進めることは、生徒の適応、レジリエンスを高めることにつながり、生徒が学校で安心して仲間・教師と共に過ごすことができ、生徒主体の取り組みであっても、教師や学校がそれを支えることの重要性が実証により確認された。

研究成果の概要（英文）：The students' problems of modern schooling continue to increase. The loss of empathy and lack of interpersonal relationships have been pointed out, and the well-being of children and the development of a safe school climate are urgent issues. The purpose of this study was to promote school preventive intervention through peer support, verify its effectiveness and clarify the factors that contribute to the effectiveness and continuity of school care system construction. The subject was a public junior high school A with 248 students, where students who had received training became the centres of efforts in their classes, grades and the whole school, and worked on this continuously for three years. The results of the survey showed effects on the students' bond, sense of security, school adjustment and classroom climate, suggesting the importance of teachers' understanding and cooperation in building a school care system and the importance of continuous efforts by the whole school.

研究分野：教育心理学

キーワード：学校予防教育 ピア・サポート 安心感 ケア 学校ケアシステム 中学校 中学生

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

社会の急激な変化に伴い、人と人とのつながりの希薄化が指摘されてきた(門脇, 1997; 土井, 2008)。庄司他(2015, 2016, 2017, 2018)は対人関係の欠如・不足がもたらす学校不適応に関する先行研究の指摘を踏まえ、学校生活において多様な困難を抱えた生徒に対し、社会的絆(Hirschi, 1994)、「聴くこと・聴き合う関係」の観点から中学校と高校で生徒の社会的絆の形成と回復支援を行ってきた。その結果、生徒の多様な困難の背景には、人との関わりにおける蓄積された傷つき体験、家庭環境の影響、発達障害に係る2次障害、があげられるが、教師、スクールカウンセラー等の支援によって「重要な他者との愛着」が形成され、信頼感、学校適応、メンタルヘルスに改善が見られることが明らかになった(庄司他, 2017, 2018)。

一方、子どもの問題の多様化・深刻化、事件事故、災害の多発等から児童生徒のレジリンスを高める「予防教育」が行われるようになったが(Sugai & Horner, 2006; 小泉, 2016)、校内支援体制の構築(大久保他, 2007)、持続的取り組みやシステム構築が課題とされている(渡辺, 2015)。

本研究はこれらの指摘を踏まえ、人との関わりに困難を抱える生徒、および生徒全体に対する1次的、2次的、3次的学校予防教育を進め、これを継続的、持続的に行うための要因を明らかにし、すべての子どもが学校で安心・安全に過ごし、学校適応を高める「持続的ケアシステム」の構築をめざす。子どもの抱える困難への支援、予防教育の効果を高めるには、持続的取り組みが強く求められると考える。支援の継続と持続こそ、児童生徒、教師らの学校のメンバーが入替わっても支援の効果を維持し、さらに高めることにつながると考える。

先行研究(Pinkelman et al. 2015, McIntosh et al., 2015)によれば生徒支援活動の持続可能性に係る予測要因として教員の同意、学校管理職の理解・支援、チームの支援機能等があげられ、阻害要因には教員の同意、時間・予算の制限等があげられる。日本でも継続的取り組み、システム構築が求められるが(小泉, 2016他)縦断研究による持続要因はほとんど検討されていない。庄司は「社会的絆」(Hirschi, 1969)、「聴き合う関係」(鷲田, 1999; Shoji, 2015)の観点から中学校・高校で生徒の人間関係づくり、学校支援を進め、生徒の対人関係、学校適応、進路選択に成果を確認してきたが、高校生の不適応の背景に小中学校からの蓄積された対人的傷つきが予測された。そこで、生徒の対人関係上の困難を考慮し、より早期から予防教育を実践し、人とのつながりの回復、対人不適応への支援を継続し進める必要があると考えた。そこで本研究は、これまでの成果を基に学校予防教育で「聴く」「聴き合う」関係づくりを進め、これをケアする人間関係づくりとし、学校全体で継続的にこれに取り組みその効果を実証する。

## 2. 研究の目的

本研究は、近年増加し続けている不登校やいじめなどの問題の背景に人とのつながりや共感の不足、学校生活での安心や信頼感の低下などが背景にあると考え、学校での人とのつながり、ケアする人間関係づくりを中心に学校全体での学校予防教育を進め、その効果を検証する。また、「人とのつながり」「ケアする人間関係」を継続的・縦断的に進め、学校における「持続的ケアシステム」構築、その形成、維持要因を明らかにすることを目的とする、具体的には、ピア・サポート尺度の開発(研究1)、中学校での予防教育実践校と非実践校の比較による予防教育の効果検証(研究2)、予防教育を継続的、縦断的に進めることによる生徒の変化の検討(研究3)、仲間からのケア(ピア・サポート; 以下PS)と生徒の安心感、適応との関連の検討(研究4)、予防教育が生徒に及ぼす影響の質的検討(研究5)、学校予防教育の縦断的実施による「持続的ケアシステム」構築のプロセスの検討(研究6)、を行った。なお、予防教育を学校全体で進めるにあたり、活動の展開は小泉(2016)のアンカーポイント植え込みを参考にした。

### 3. 研究の方法

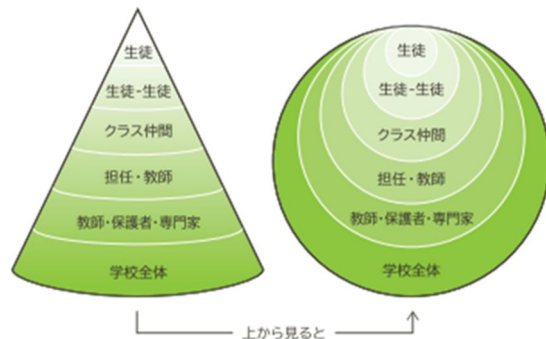
**対象者：**対象者は学校予防教育の実践校 A 校に通う中学 1 年生～ 3 年生 248 名（年度で変動。このうち 2019 年 4 月～2022 年 3 月の 3 年間の縦断的データの対象者は 192 名。非実践校 B 校 256 名，C 校 247 名，D 校 495 名，計 1,000 名，合計 1,248 名。

**測度：**実施した調査は次の 5 つである。(1)ピア・サポート(PS)尺度（2 下位尺度 10 項目，庄司他，2017），(2)学級風土尺度(CCI)（8 下位尺度 24 項目，伊藤他，2017），(3)社会的絆尺度(SB)（5 下位尺度 20 項目，庄司他，2016），(4)学校適応感尺度(SA)（4 下位尺度 17 項目，大久保，2005），(5)安心感尺度(SF)（2 下位尺度 15 項目，庄司他，2017），(6)ソーシャルサポート尺度(SS)（3 下位尺度 15 項目，細田他，2009）。

**手続き：** **実践校 A 校：生徒の研修と活動：**(1)各クラスの代表生徒 2 名（男女）は学校支援者（筆者他）から予防教育（PS）の研修（春と秋 4 回），計 8 回参加した。(2)代表生徒は研修で学んだことを各クラスで実践する。(3)活動はクラスから，学年，学校全体に広げられ，代表生徒は常に中心的役割を担い，学校予防教育（学校の年間計画）を展開する。階層的支え合う関係づくり（「学校ケアシステム」）が右図に示されている。

**教師の研修：**先行研究で教師の活動理解，支援が実践の維持，定着に影響することが指摘されている。そのため，教師の活動の理解，関与を高める目的で A 校の教師にも研修を行った。

**調査期間：**2019 年度～2022 年度各年度の春と冬（コロナで 2020 年活動回数減少）。



チーム学校としての予防教育における生徒を支える階層的サポート

### 4. 研究成果

#### 研究 1 ピア・サポート尺度の開発と信頼性・妥当性の検討

**因子分析：**ピア・サポート尺度 10 項目，実践校と非実践校の対象者 835 名（男子 407 名，女子 428 名）分を因子分析した結果，情緒的・共感的サポートと道具的サポートの 2 因子が抽出された（Table 1）。学年と性の分散分析の結果，情緒・共感尺度（EES），道具的尺度（IS）の授受において女子が男子より顕著に得点が高く，有意な差が示された（ $p < .05 \sim .01$ ）。学年に差は示されなかった。**信頼性と妥当性：**2 下位尺度の係数は .83，.89（ $p < .001$ ），218 名に実施した再テストの相関は .53～.67（ $p < .001$ ），ソーシャルサポート 3 下位尺度との相関は .62～.74（ $p < .01$ ）で，一定の信頼性と妥当性が確認された。

Table1 Exploratory factor analysis of Peer Support Scale (Maximum likelihood method, Promax rotation)

	F1	F2
<b>F1 Emotional and empathic support (<math>\alpha=.83</math>)</b>		
6 Listen to me when I'm in trouble	.91	.00
5 Advise me when I don't know what to do	.88	-.03
7 Encourage me when I'm in trouble	.81	.11
1 Comforts me when I'm in trouble	.68	.10
4 Leave me alone when I'm in trouble	.55	.01
3 Talk to me when I am left behind	.39	.17
<b>F2 Instrumental support (<math>\alpha=.89</math>)</b>		
9 Lend or show me something when I forget	-.11	.88
8 Help me when I'm in trouble	.16	.73
10 Say me a joke and change my feeling	.14	.58
2 Teach me a task that I don't understand	.23	.49
<b>Factor correlation matrix</b>		
	F1	-.72
	F2	-

#### 研究 2 学校予防教育実践校と非実践校の比較

予防教育実施の効果を確認するため，2020 年 3 月，実践校 A 校 248 名，非実践校 3 校 1,000 名の下位尺度得点の比較を行った。その結果，情緒的サポート，学級満足，信頼と受容，安寧と幸福感等，12 の下位尺度に 0.1%水準の有意な差が示された（Figure 1）。

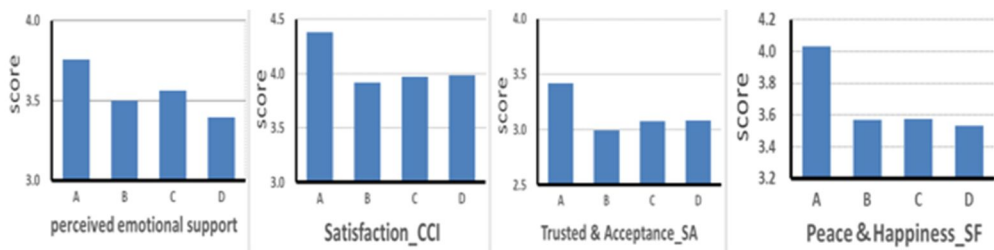


Figure 1 Main significant scores among the 4 schools

**研究3** 予防教育（ピア・サポート）の3年間の実施の効果と縦断的效果の検討

予防教育の継続的実施の効果を検証するため、2019年春と2019年度終わりから毎年年度終わりの3年間、合計323名の下位尺度得点を分散分析にかけた。下位尺度ごと結果は異なるが、1年春より冬、1年春～3年春より3年の冬が有意に高く継続的実施の効果が示された（Table 2）。

次に仲間から受けたピア・サポートの効果を確認するため、1年生96名のうち、受けたサポートが増えたグループ（Inc\_group）23名、変わらないグループ（NC\_group）25名、減ったグループ（Dec\_group）15名に分け、下位尺度を繰り返しのある分散分析にかけた。その結果、21下位尺度中8下位尺度（安心感の幸福・安らぎ、学級適応のうち居心地、被信頼・受容、社会的絆の友人アタッチメント、学級風土の仲間の親しさ、学級満足、学級活動関与、自然な自己開示）においてサポートが増えた群が他の2群に比べ有意に増加した（それぞれ  $p < .01$ 、Figure 2）。

**研究4** 予防教育における仲間からのサポートが生徒の安心感、適応に及ぼす影響

予防教育における仲間からのケア（PS）が生徒の学校適応感、安心感にどのような影響を及ぼすかを検討するため、2019年度終わりの1年～3年まで192名のデータが共分散構造分析にかけられた。分析の結果、ピア・サポートは学級の雰囲気、仲間へのつながりを介して学校適応を高め、生徒の安心感につながることを示され（Figure 3）、適合度については一定の結果が得られた（ $GFI = .93, AGFI = .88, RMSEA = .08$ ）。

Table 2 Three-year changes in subscale scores of 7th graders and results of ANOVA

Subscales	7th grade(2019)		8th(2021)	9th(2022)	F value	multiple comparison
	June(a)	March(b)	March(c)	March(d)		
	Mean(SD)	Mean(SD)	Mean(SD)	Mean(SD)		
Perceived Emotional Support	3.28(.98)	3.55(1.03)	3.59(.99)	4.10(.79)	7.50 ***	d>a,b,c
Attachment to Friends_SB	4.22(.64)	4.51(.53)	4.34(.69)	4.43(.62)	3.47 **	b>c
Attachment to Teachers_SB	3.71(.84)	3.82(.77)	3.75(.85)	4.22(.67)	5.00 ***	d>a,b,c
Classroom Activity Involvement_CCI	3.62(.79)	3.99(.85)	3.96(.64)	4.22(.71)	7.64 ***	b>a, c>a, d>a
Closeness among peers_CCI	3.59(.90)	4.14(.75)	4.11(.85)	4.35(.67)	12.02 ***	c,d>a, c>b
Classroom Satisfaction_CCI	3.78(.82)	4.16(.85)	4.16(.97)	4.41(.70)	6.53 ***	b>a, c>a, d>a
Self-Disclosure_CCI	3.27(.87)	3.65(.97)	3.46(1.06)	4.08(.73)	8.51 ***	b>a, d>a,c
Trust & Acceptance_SA	2.98(.71)	3.09(.80)	3.16(.89)	3.74(.75)	10.03 ***	d>a,b,c
Happiness & Peace_SF	3.55(.93)	3.87(.87)	3.77(.93)	4.23(.74)	6.58 ***	d>a,c
Tranquility SF	3.80(.87)	3.88(.83)	3.89(.93)	4.22(.71)	2.70 *	d>a

SB: Social Bond, CCI: Classroom Climate Inventory, SA: School Adjustment, SF: Secured Feeling

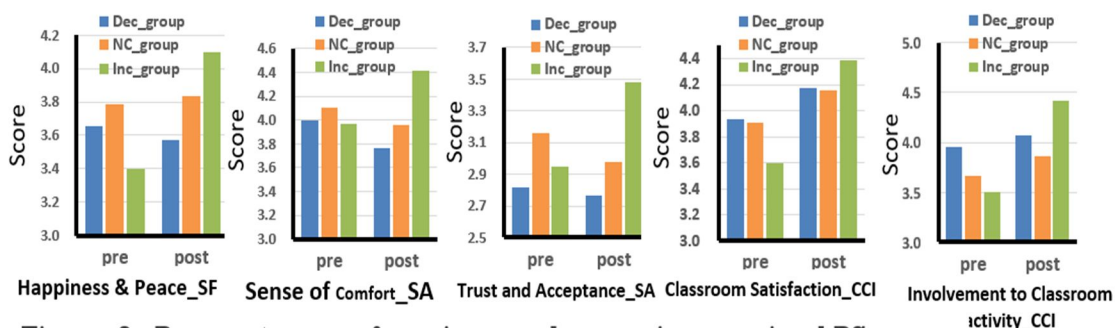
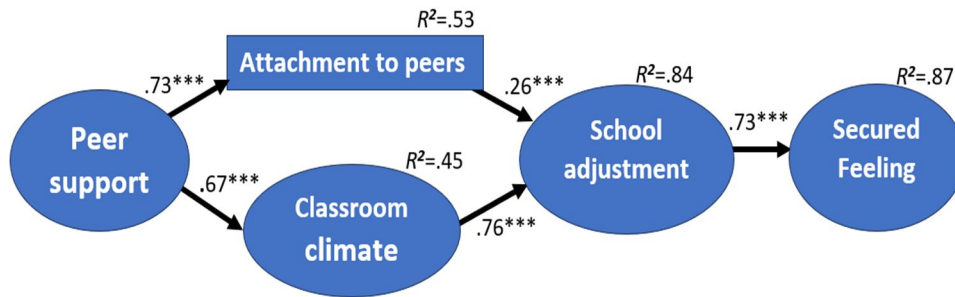


Figure 2 Pre-post scores focusing on changes in perceived PS



GFI=.93, AGFI=.88, RMSEA=.08

Figure 3 Effect of preventive intervention on school adjustment and secured feeling

**研究5** 予防教育が生徒に及ぼす影響の質的検討

研究5の目的は、予防教育(PS)の生徒への影響について生徒にインタビューを行い質的にこれを明らかにすることである。調査対象はクラスで中心的役割を果たした3年生男女各6名計12名。一人約30分の予防教育とその影響、変化に関する半構造化面接を行った。分析の結果、生徒の変化として、話の聴き方・伝え方、コミュニケーションの意識、仲間との関りの変化、クラスの変化として、良好な人間関係、授業の話し合いの深化、相互支援、教師の変化として、話の聴き方、生徒との関わりや活動支援、授業スタイルの変化が語られた。PSによって生徒、教師相互に変容をもたらされ、学校全体が支え合い、安心と信頼の絆、教育活動のポジティブな変化が示された。先行研究同様、本研究でも、教師、学校組織の支援の重要性が示唆された。

**研究6** 学校予防教育の縦断的実施による「持続的ケアシステム」構築のプロセス(仮説モデル)

研究の成果を踏まえ、ピア・サポートによる学校予防教育が生徒の適応と問題行動の未然防止につながる仮説モデルを検討した。学校予防教育を通して生徒が助け合い、支え合うことでコミュニケーションと相互作用が促進され、生徒相互の信頼感と安心感が醸成され、生徒はクラスに居場所が感じられ、学級への関与、学級活動、学習活動も活発になり、生徒の学校適応、問題の予防が促進される。これをケアシステム構築仮説モデルとした(Figure 4)。このモデル実現のためには、活動が学校全体で組織的、計画的、継続的に進められること、さらに教師の生徒とのコミュニケーション、生徒の活動支援は、効果をもたらす重要な要因であることが指摘された。

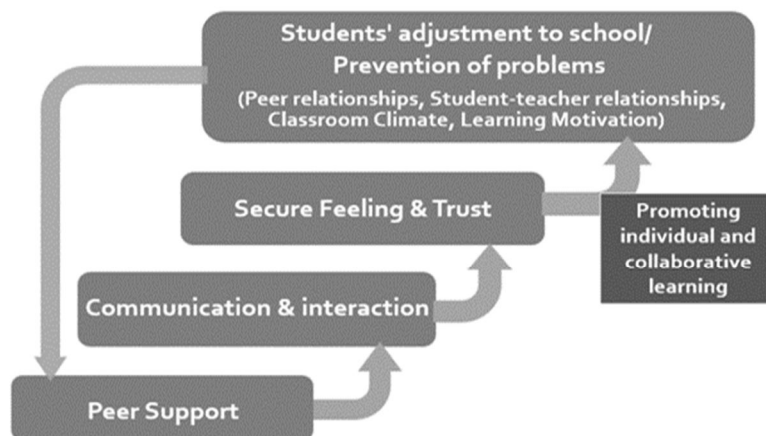


Figure 4 Development and effectiveness of proactive school preventive intervention (Hypothetical care system model)

主要引用文献

渡辺弥生(2015). 健全な学校風土をめざすユニヴァーサルな学校予防教育 免疫力を高めるソーシャル・スキル・トレーニング とソーシャル・エモショナル・ラーニング 教育心理学研究, 54, 126-141.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計23件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 19件）

1. 著者名 庄司一子・高橋智子	4. 巻 第2号
2. 論文標題 ピア・サポートの学びがもたらすものーピア・サポート活動による中学生の学びと変容ー	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 東海大学児童教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高橋智子・庄司一子	4. 巻 27
2. 論文標題 小学生を対象とする学校予防教育の実践と効果：中学校移行への継続的な支援を目指して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 文理シナジー	6. 最初と最後の頁 129-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 加藤良則・庄司一子	4. 巻 70
2. 論文標題 「生と死の教育」におけるTeachable Moment Processの検討ー「いのち」に対する児童生徒の認識と教師の対応の検証を通してー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育心理学研究	6. 最初と最後の頁 131-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5926/jjep.70.131	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松永 恵・庄司一子	4. 巻 64
2. 論文標題 養護教諭が子どもの不定愁訴に対応する際の困難感の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学校保健研究	6. 最初と最後の頁 226-234
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20812/jpnjschhealth.64.3_226	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 江角周子・庄司一子	4. 巻 7
2. 論文標題 中学生における聴くことに関する認知・聴く行動とサポート行動との関連 ピア・サポートの実践内容・方法の検討のために	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 共生教育学研究	6. 最初と最後の頁 83-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 市川定子・庄司一子	4. 巻 7
2. 論文標題 学校における児童虐待への対応について：現状と課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 共生教育学研究	6. 最初と最後の頁 35-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菅野和恵・山崎優子・石隈利紀	4. 巻 22
2. 論文標題 発達障害のある青年の母親の心理的適応過程 保護者の援助ニーズに焦点をあてて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 学校心理学研究	6. 最初と最後の頁 71-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24583/jjspdedit.22.1_71	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宗形奈津子・石隈利紀・田村節子・設楽直子・三井菜摘・松井友子・青島芳子	4. 巻 23
2. 論文標題 特別支援教育システムを機能させる管理職モデルの生成と評価	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 学校心理学研究	6. 最初と最後の頁 25-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24583/jjspdedit.22.1_71	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石隈利紀	4. 巻 69
2. 論文標題 生徒指導を支えるチーム学校の体制：「みんなが資源 みんなで支援」による生徒支援	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 指導と評価	6. 最初と最後の頁 22-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石隈利紀	4. 巻 52
2. 論文標題 チーム学校による生徒指導：児童生徒の主体性と意見を活かす	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 月間生徒指導	6. 最初と最後の頁 14-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 庄司一子・高橋智子	4. 巻 9
2. 論文標題 中学校におけるケアと安心感の醸成－継続的・縦断的ピア・サポート実践を通して－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 共生教育学研究	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高橋智子・庄司一子	4. 巻 9
2. 論文標題 話し合い活動を中心としたピア・サポートトレーニングによる生徒のコミュニケーションの変容プロ節の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 共生教育学研究	6. 最初と最後の頁 13-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -



1. 著者名 幅崎麻紀子・庄司一子	4. 巻 9
2. 論文標題 日本語指導が必要な生徒の高校卒業を支える要因―一定時制高校の事例から―	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 共生教育学研究	6. 最初と最後の頁 39-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ceva Zahra Fathiya・庄司一子	4. 巻 9
2. 論文標題 日本の学校の多文化環境における移民生徒の仲間関係―X中学校でのフィールドワークを通して―	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 共生教育学研究	6. 最初と最後の頁 89-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 庄司一子・高橋智子	4. 巻 8
2. 論文標題 ピア・サポートにおける「聴く」ということの意味―サポートシステム構築とケアの実現―	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 共生教育学研究	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 淵上 岳・庄司一子	4. 巻 8
2. 論文標題 いじめの加害生徒に対する教師による指導の検討―中学校教師へのインタビュー調査を通して―	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 共生教育学研究	6. 最初と最後の頁 77-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 貴志光加里・庄司一子	4. 巻 8
2. 論文標題 児童の学校生活における安心感の検討－教師や友人との経験・愛着に焦点をあてて－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 共生教育学研究	6. 最初と最後の頁 131-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 幅崎麻紀子・庄司一子	4. 巻 7
2. 論文標題 高等学校における「日本語指導が必要な生徒」の教育の課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 共生教育学研究	6. 最初と最後の頁 23-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野村祐介・庄司一子	4. 巻 7
2. 論文標題 中学校段階におけるスクールカーストの形成プロセスの検討－M-GTAを用いた質的分析を通して－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 共生教育学研究	6. 最初と最後の頁 13-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石隈利紀	4. 巻 22
2. 論文標題 チーム学校で促進する学校メンタルヘルス～学校心理学の立場	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学校メンタルヘルス	6. 最初と最後の頁 32-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Ichiko SHOJI, Tomoko Takahashi, Masami Shoji & Masaki Nakata
2. 発表標題 Building and testing the effectiveness of a school care system that fosters a "secured feeling": Through peer support activities
3. 学会等名 44th Annual Conference of the International School Psychology Association (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 古田伸子・石隈利紀・田村節子
2. 発表標題 中学校教師が抱く信頼感と生徒への指導行動との関連－職場環境の媒介効果の検討－
3. 学会等名 日本教育心理学会大64回総会発表論文集
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 庄司一子・高橋智子・中田匡紀・庄司正実
2. 発表標題 「安心」を育む学校ケアシステム構築の取組と効果検証（ ）－ピア・サポート活動を通じた生徒の変容－
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高橋智子・庄司一子・中田匡紀
2. 発表標題 「安心」を育む学校ケアシステム構築の取組と効果検証（ ）－ピア・サポート実践を通じた教師の認知と行動の変容に着目して－
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ichiko SHOJI & Tomoko TAKAHASHI
2. 発表標題 Effects of progressive peer support training on junior high school students: Development of peer support scale and longitudinal study
3. 学会等名 41th International Annual Conference of the International School Psychology Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tomoko TAKAHASHI & Ichiko SHOJI
2. 発表標題 Effects of progressive peer support training on junior high school students: Pervasive effect on members to peer support-supporter members
3. 学会等名 41th International Annual Conference of the International School Psychology Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Makiko HABAZAKI & Ichiko SHOJI
2. 発表標題 How do Japanese school teachers face educational difficulties in transition to Multicultural Symbiotic Societies?
3. 学会等名 41th International Annual Conference of the International School Psychology Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yansong Wang & Ichiko SHOJI
2. 発表標題 Special Needs Education at High School in Japan — Focusing on the case of part-time high school —
3. 学会等名 41th International Annual Conference of the International School Psychology Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	石隈 利紀  (Ishikuma Toshinori)  (50232278)	東京成徳大学・応用心理学部・教授   (32521)	
研究 分担者	幅崎 麻紀子  (Habazaki Makiko)  (00401430)	埼玉大学・研究機構・准教授   (12401)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	高橋 智子  (Takahashi Tomoko)	女子美術大学・芸術学部・准教授   (32626)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------